

The reception of Anton Chekhov's literature in
Japan : understanding of "Vishnyovyi sad" by
IBUSE Masuji

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-08-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河野, 基樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1035

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



日本におけるアントン・チェーホフ文学の受容

— 井伏鱒二の「桜の園」理解 —

河野基樹

1 ロシア文学と日本

ロシア文学が、日本に継続的かつ組織・系統的に移入されるのは、一八八〇年代に入ってからのことである。当初の移入については、三つの経路が考えられている。(1)東京外国語学校、(2)ニコライ神学校、(3)書肆・丸善、がそれである。

移入されたロシア文学は、日本文学の中でどのように受容されたのか。概括するならば、「ナロード (narod) 的心情への共感」という姿勢で、今日まで一貫していると言える。「十九世紀ロシア文学の反体制指向とナロード指向の感傷的人道主義という一性格、その一点から (ロシア文学に) 反応するという習慣を日本の知識人たちは培^証ってきたのである。そして、その主調の中から、後のボルシェビキの文学思想への態度も、又、アヴァンギャルドの表現に対する受容の意識も分極していった。井伏鱒二も、謂わばこのナロードに関する描写を、ロシア文学の中で最も関心ある部分であると度々語っている。

2 チェーホフ文学と日本

日本の文学者にとって、ロシア文学とはなにより、ツルゲーネフ、トルストイ、ドストエフスキの文学のことであった。そのような中で、アントン・パーヴロヴィチ・チェーホフ (Антон Павлович Чехов, 1860. 1. 17-1904. 7. 2) の名は比較的地味な存在であった。しかし、チェーホフ受容はその一方で、絶えることなく穏やかに続いていた。

チェーホフ作品の紹介は、ニコライ神学校の関係者・瀬沼夏葉が、一九〇三年、「月と人」、「写真帖」を翻訳したことを嚆矢とする。その後の受容は、次の三つの時期を経る。

- ① ロシア語からの直訳、英訳からの重訳による、短・中篇小説の紹介、「名作・傑作集」の編纂がなされた、「明治」末から「大正」初期の〈第一期〉
- ② 「大正」中期以降、重訳を含む『全集』が編纂された〈第二期〉
- ③ 中村白葉の翻訳による『全集』の完結が成った「昭和」初期

の〈第三期〉

日本には現在、近代日本文学におけるチェーホフ受容の全般に言及した主なものとして、昇曙夢「日本文学とロシア文学」(チェーホフの伝来とその影響)^{註2)}、神西清「チェーホフ没後五十年に際して」^{註3)}、柳富子「チェーホフー明治・大正の紹介・翻訳を中心に」^{註4)}、がある。佐藤清郎は、『チェーホフ芸術の世界』「日本におけるチェーホフ」^{註5)}において、特に、正宗白鳥と広津和郎のチェーホフ受容を詳述する。所謂〈早稲田派〉のチェーホフ受容の盛況は特筆すべき事柄である。右の白鳥に加え、前田晁、秋庭俊彦、三上於菟吉、黒島伝治の名前が挙げられる。さらには、日本のチェーホフ受容の内容上の特質として、レフ・シエストフ (Лев Шестов, 1866. 1. 31-1938. 11. 20) 的解釈からの強い影響を指摘できる。

チェーホフを絶望とか虚無とかの作家として解釈(する)シエストフ「虚無よりの創造」(一九〇八年)の考え方が日本に移入され、久しい間にわたって、わが国におけるチェーホフ観を支配しつづけてきた(「ロシア・ソビエトにおけるチェーホフ評価」^{註6)} 原卓也)

3 井伏鱒二とチェーホフ文学

3・1 広範囲におよぶチェーホフの影響

井伏鱒二およびその文学に及ぼした、チェーホフ文学の影響は、深くかつ広範囲に亙る。〈随筆〉での言及はもとより、〈小説〉のモチーフや、プロットへの影響、これに井伏本人からの〈聞き書き〉を含めると、多くの事例が抽出できる。

著名な(日本人)作家でチェホフを愛し、よく読みもし、そ

の作品にも影響があると思われるのは、正宗白鳥、広津和郎、それに井伏鱒二ぐらいではなからうか。三人とも初期の作品にチェホフとの結びつきがもつとも深く、またそれ等の作品によって何れも文壇に迎えられている。(「チェホフと日本文学」^{註7)} 大谷深)

近代日本文学史における、チェーホフ受容を巡る井伏の位置を定める必要性が生じる。

3・2 井伏の〈随筆〉にみるチェーホフの影響

チェーホフ文学の影響は、随筆においてまず如実である。その主なものに順に追うならば、一九三六年に、「シングに全く感心したのは後に早稲田に入学してからのことで、順序からいへばチェホフに感心してその次にシングに感心した。」(「学校に行く」^{註8)}との言が井伏にある。チェーホフ受容は、早稲田在学中(一九一七年九月〜二二年五月)に始まった。シング(Edmund John Milington Syngé, 1871. 4. 16-1909. 3. 24)は、アイルランドの劇作家。

私(井伏)はチェホフやドストイエフスキヤバルザックの翻訳書を、幾度も買ったたり幾度も売つたりして、同じ書物を学生のとときからくり返して読んでゐる。(「困難なこと」^{註9)} 三一年五月)

ドストエフスキヤ、バルザックを翻訳で読んだことと併せて、学生時代以降も繰り返しチェーホフを繙いたことが分る。チェーホフを巡る井伏の事跡は又、「下宿の私の隣の部屋にゐた商科の学生は、私の部屋から無断でガーネットのチェホフ全集を持ち出して質に入れた。引きつづき私のトルストイ全集を持ち出して古本屋に売

却した」〔早稲田生活〕三六年八月^(註10)との逸話に窺われる。その受容は、ガーネット英訳本と翻訳本の読書が平行した幅広いものであった。当時の井伏周辺の学生達のチェーホフを巡る情調がどのよう^(註11)に構成されていたかは、『オロシア船』の「後記」にある、「文壇では人道主義がまだ盛んに行なはれてゐて、しかし私たち学生仲間では、懐疑的な考へかたが何か魅力的なものとされてゐた当時のことである。私たちはそれをチェホフ的懐疑といつてゐた。」(三九年一〇月)^(註12)との井伏言に明らかである。井伏の学生時代のチェーホフ親炙は、次の戦後の随筆によつても裏付けられる。

当時（学生時代）の私は、チェーホフの小説を「小説早わかり」の虎の巻だと思つてゐた。チェーホフの脚本は「近代劇早わかり」の虎の巻だと思つてゐた。チェーホフが奥さんに与へた書翰集は「小説作法早わかり」の虎の巻だと思つてゐた。

〔チェーホフ〕五九年一二月^(註13)
五〇年代には又、チェーホフ作品「熊」（一八八八年八月）についての随筆がある。

ぼつんと途切れた（モーパッサン）「女の一生」の劇的場面のと後に、「熊」を置いてみたらどうだらうと思つた。なんとなく辻褄が合ふ。私は、ぼつとした。〔チェーホフの「熊」について〕一九五四年一〇月^(註14)

ドストエフスキー、トルストイのみならず、バルザック、モーパッサン、シングの名が登ることから推して、ロシア文学と他の欧文学との比較文学的受容の実態が明瞭である。

3・3 井伏の〈小説〉にみるチェーホフの影響

随筆の場合と同様に、小説においても影響が窺われるものは少なくない。「山椒魚」(「文芸都市」二九年五月)をはじめ、「幽閉」(「世紀」二三年七月)、佚存の「山椒魚の嘆き」^(註15)などは、精神的・肉体的「幽閉」と、その状況下における「思索」という作品主題に關つて、チェーホフ「賭」(一八八九年一月)からの明かな影響がみられる。

(一九三三年)「世紀」といふ同人雑誌に、処女作「山椒魚」を発表したことがある。これはまだ早稲田に在学中、予科二年の夏休みにチェーホフの「ベット」といふ短篇の刺戟を受け田舎の家で書いた。(その後)学校を中途退学して瀬戸内海の因の島でトルストイとチェホフとを読みながら、見やう見真似で小説を書いてゐた。(「習作時代」(私の文学的生活)三五年二月)^(註16)
チェーホフ「ベット」の現在の邦題は「賭」。戦後にも、「山椒魚」創作のきっかけに關して、「チェーホフの作品の一つに、「賭」という題の短篇があります。この作品にそそられて「山椒魚」を書きました。チェーホフの憂愁と笑ひを取入れるつもりでした。」(「山椒魚」について「六六年一二月」)^(註17)の言が残っている。「閉塞状況下における人間が如何に思索するか」というこのテーマにまつわつて、同じモチーフを持つ作品として、「冷凍人間」(「頓生菩提」)(「改造」三四年一二月)も見落とすことはできない。

さらに、井伏「うちあはせ」(「文学界」二五年一月)、「幻のさ、やき」(「少女画報」二八年一月)にも主題上の影響を読み取ることが出来る。又、作中に「チェーホフ」の語が見える小説として、「りべるて座」(「中央公論」三四年九月)、「白鳥の歌」(「痴人」)(「文学界」五四年五月)がある。「りべるて座」は、チェーホフ作品「熊」

を上演しようとする劇団の物語。「白鳥の歌」は、チェーホフの同名の作品「白鳥の歌」（一八八七年一月）と同一のタイトル。井伏「白鳥の歌」の中に、「私は筆筒のなかの書物を参考に、チェホフの「白鳥の歌」といふ一幕物を翻案するつもりであった」、「よほど以前のこと、私は後藤といふ旅役者のためにこの「白鳥の歌」を翻案したことがある」、といった言説がある。

3・4 井伏からの〈聞き書き〉にみるチェーホフの影響

井伏本人からの〈聞き書き〉にもチェーホフへの傾倒のさまが明らかである。

（「山椒魚」は）その頃（十九歳の頃）読んだチェホフの「賭」に感激して書いたもの。人間の絶望から悟りへの道程を書こうと思ったので。（《作家に聴く》井伏鱒二 一九五二年九月）^{〔註17〕}

「山椒魚」はチェーホフの「賭」を読んでから書いたんだ。「賭」は賭に負けて閉じ込められた一人の男が、絶望から悟りにはいる筋なんだが、「山椒魚」は悟りにはいるうとして、はいれなかったところを書きたかった。（井伏さんから聞いたこと）^{〔註18〕}の二）伴俊彦 六四年一月

いずれも、チェーホフからの影響を語る井伏の「生」の声である。

4 チェーホフ文学からの影響の時代的上限と下限

井伏のチェーホフからの影響の時代的上限は何時なのか。上限は、友人・青木南八の助言に与ったことに極まる。「以前、南八は私に、日本人の翻訳でドストエフスキーをいきなり読むと深刻癖になるから危いと云った。先ずチェホフを読み、プーシキンを読み、トルス

トイを読み、それからドストエフスキーを読めと云った」（「半生記」^{〔註19〕}）との懐古の談がある。青木南八との交友は、一九一九年以降である。これに上限は確定される。

それでは下限は何時頃か。井伏の晩年に、チェーホフの戯曲「桜の園」（Вишневый Сад 1904）について述べた「桜の園」という文章があることに着目したい。井伏のこの「桜の園」は、一九八九年一月、雑誌「海燕」に掲載されたものである。チェーホフの「桜の園」と、井伏の「桜の園」とは全く同名の文章である。前者は戯曲、後者は随筆。両者の比較検討に当り、混同を避けるために、井伏の「桜の園」を、以下では《桜の園》と表記する。

井伏のこの《桜の園》が井伏の死の四年前に書かれたことを重視したい。井伏の文章は、晩年の凡そ五年の間、あるいは十年に広げても、友人知己についての随想や弔辞によって多く占められている。このことから、書き下ろしの文学論である《桜の園》は例外的存在であり、井伏のチェーホフ文学への終生変わらぬ関心を明瞭に示す指標になっている。つまり、《桜の園》は、一九一九年に始まり、その後七十余年に及ぶことになった井伏のチェーホフ思索の謂わば時代的下限を形作る、締め括りの文章なのである。

5 コメディ・ファルス・ヴォードヴィル

井伏の随筆《桜の園》は、三つの部分により構成される。その中でも、最も大きな内容上の第二段落目において、井伏は、チェーホフ「桜の園」の作品批評を行なっている。ここでは、次の三つの事柄が述べられている。

① チェーホフ「桜の園」の物語内容（ストーリー）の解説

② 「桜の園」と、他のチェーホフ作品との質的比較

③ 前二者①、②から帰納されてくるチェーホフ文学の特質、とりわけ作品「桜の園」が、歴史・社会的視点からの批評性を持つことの指摘

右を踏まえ、最も強く主張されるのは、井伏の言に拠れば次の事柄である。

チェーホフの晩年の作品「桜の園」はコメディであり、ファルスである。デリケートな抒情詩との優雅な結合である。この戯曲のヴォードヴィルのな要素（《桜の園》）

井伏の《桜の園》は、チェーホフ「桜の園」を、コメディ、ファルス、ヴォードヴィルと規定する。この三つは本来いずれも、物事を批評するという機能・精神を概念として持っている。井伏は、この批評の機能が「桜の園」にあつて、敷衍されては、二〇世紀初頭に、ロシアに生じていたさまざまな時代課題に対する、歴史・社会的な批評実践となつて顕れているということを言いたいのである。

コメディ、ファルスの本質とは何か。コメディ（comédie）とは、悲劇とならぶヨーロッパの劇の基本の形式。ギリシャを起源とする。一八世紀辺りから、ブルジョアの価値観を反映して、教訓と実用性を重んずるものとなった。「喜劇を単に笑うべきものでなく、何ほどかまじめなものにしようという姿勢が認められ」、「それは実用性を離れて純粋に芸術的な次元でも、その後長く保たれる姿勢であり、チェーホフ」にも、「指摘できる現象である」。「現実喜劇的とも悲劇的とも割り切れないとする考え方」がその背景にあるためである。一方、ファルス（farsce）とは、フランス中世に成

立した喜劇の一ジャンル。笑劇。本格的喜劇に比して低く見なされるが、「現代の社会あるいは人間の状況に迫る切実な手法として認識される場合もある」。

「桜の園」を、コメディ、ファルスと井伏が言うことから、井伏本人は、批評という「思想」の有用性が原理的に目されたものとの戯曲を規定しているのに等しくなる。したがって、井伏のチェーホフ文学の規定に次の片上伸の言を併置する時、井伏本人の意識の如何に拘らず、井伏は片上の《正系》であつたと言うことも可能になつてこよう。

チェーホフの作品は、一面亡び行く時代に対する挽歌でもあるが、その涙の中には、笑ひがある、否定がある、諷刺がある、批評がある。現代の日本文学に、最もあるべくしてないのは、この批評である。（現代日本文学の問題）片上伸

ヴォードヴィル（vaudeville）とは、フランス喜劇の一ジャンル。起源は、フランス・ノルマンディー。一六世紀には歌謡であつたものが、一七世紀には、演劇と結び付いた。最盛期は一九世紀。「今日ヴォードヴィルは、陽気で色気の漂う軽喜劇の意」。

「桜の園」を含む日本のチェーホフ受容の全般はしかし、これとは対照的に、チェーホフ文学を《悲劇の文学》として情意的に捉え、理解する傾向が強かつた。この傾向は、前述のように、シエストフのチェーホフ論である「虚無よりの創造」が原因である。同著の邦訳は、一九三四年である。

《日本シエストフ元年》に当るこの三四年は、日本のインテレクチャルの多数が、思想転向した時期と正確に重なり合っている。この事実からもシエストフ流日本型チェーホフ受容の質は、己が思

想・思索の転向を「悲劇」として情意的に決着した日本インテレクチャルの性癖と同一位相上にあると言えまいか。

彼（チェーホフ）の傾向を簡単に形容すれば、これを絶望の詩人と呼ぶことが出来よう。彼は二十五年の長きに亘って、陰鬱な頑迷さを以て、只もろもろの人間のもろもろの希望を殺すことに没頭していた。（シエストフ「虚無よりの創造」^{註24}）

これが、日本の「昭和」一〇年代の社会・思想状況を巡るインテレクチャルの「暗い」情調に比況されるのだ。したがって、当時の日本では、井伏の如き《桜の園》解釈の文脈、すなわち、チェーホフ文学の社会批評的側面の先駆性を評価することで、その作品を解釈しようとする途には就き難かった。それは、歴史の端境期に没落して行く人間を、専ら純粹審美上の角度から描くことに通暁しようとするかなり多くの当時の日本文学者の振る舞いと相補的な間柄にあると思われる。

チェーホフの小説を、なにかもやもやした曖昧な主題と技法を用いた、極めて芸術的なムードにみちあふれたものとして、理解しようとするセンチメンタル派の俗説が横たわっている。こうした俗説は日本のチェーホフ・ファンにも共通した謬見（である）。（篠田一士^{註25}）

この時代情調も、日本チェーホフ受容を屈曲させた要因であろう。《桜の園》はしかし、コメディ、ファルス、ボードヴィルとのその規定からも、シエストフ流日本型チェーホフ理解の《大勢》から一線を隔てたものであり、その論旨はしたがって、例えば神西清の説、すなわち、「チェーホフの文学は、主義主張（が）派手に目だつやうな性格のものでな（く）いはば無問題性がその特質であり、つまり

（中略）大人の文学なのである」^{註26}との断定とも自ずから異なるものであるといつてよい。

6 チェーホフの社会批評

チェーホフの社会批評はそれでは、そもそもどの程度の水準に及ぶものであったのか。チェーホフは「桜の園」において、登場人物・ラネーフスカヤと、ガーエフに、歴史の表舞台からの退場を余儀なくされる人物という役どころを振り当て、それとの対比の中で、後のロシアの変革に携わることを社会的使命として期待されもし、求められてもいるトロフィーモフやアーニヤを描いた。チェーホフは、彼らの置かれていた社会的立場とその質とを問題にしていたのであった。むろん、チェーホフの時代情況に関する見識は、社会科学的な分析・予測という手段による割合よりも、予期・直感によって感じられたものからの類推による部分が大きかったであろう。しかし、その社会認識の方法上の限界の一方で、チェーホフは時としてかなりの先見性に満ちた判断を下す人物でもあった。ウラジミール・レオナルドヴィチ・クニツベル（一八七六―一九四二年）は、次のようなチェーホフの言を書きとめている。

（日露戦争においてロシアが万一）勝利（するとすれば、）専制を強化し、われわれに息切れさせている圧制を強化することになるのではないか。その勝利は、迫りくる革命を阻止することになるだろう。^{註27}

チェーホフが思い描いたこの近未来の見取り図は、例えば、ロシアの社会実践家・ヴラデーミール・イリイチ・ウリヤノフによって体系化され、その後のロシアにおける社会変革の試みのなか

で論理的支柱となった理論と頗るよく似たところを持つている。ウリヤーノフは次のように述べていた。

専制が突入した困難で望みのない戦争「日露戦争」は、専制の権力と支配の基礎を奥底から破壊した。プロレタリアートは彼らにとつてめつたにない（この）有利な政治情勢を利用し（中略）政府がもつとも絶望的な状態にある瞬間、人民がもつとも沸きたつた瞬間に、蜂起をおこさなければならぬ。^{註28}

時代的には、「桜の園」上演の直後、ウリヤーノフによつて提唱され、その後のロシアで実践に移されたこの考え方は、チェーホフによつて、なんら裏づけのない夢想のようなものであつたにしろ、先見性においては見当外れではなかつたのだ。

7 井伏のエルミールロフ説への依拠

井伏は、シエストフ流日本型受容の歴史の特異性を免れていた。しかし、チェーホフとその文学の社会批評性への井伏の着目は、その全てが井伏の独創であるということの意味しない。《桜の園》の工程の段落は、次の文句で閉じられているからである。

——以上がこの戯曲が包含する気分であると、エルミールロフが云つてゐる。（《桜の園》）

具体的典拠を、ウラジーミル・ウラジーミロヴィチ・エルミールロフの『チェーホフ研究』（一九四九年）と考えたい。同書の邦訳は五三年である。先（第）5（節）の《桜の園》の言説は、エルミールロフの次の一節に拠つたのである。

「桜の園」は、喜劇——部分的には道化芝居でさえある」ととチェーホフは言つてゐる——と優雅でデリケートな抒情詩との

大胆な結合である。（エルミールロフ『チェーホフ研究』「三二」）
「今日は、新しい生活！」^{註29}

エルミールロフの言う「喜劇」は、《桜の園》では「コメディ」に、「道化芝居」は「ファルス」に各々相当する。《桜の園》と、『チェーホフ研究』の類似箇所を列挙したい。

エルミールロフ「チェーホフ研究」…チェーホフは叙情的喜劇、社会的通俗笑劇という独創的な革新的なジャンルの作家として進展を示している。

井伏《桜の園》…チェーホフは叙情的喜劇、社会的笑劇といふ独創的革新的作家としての進展を見せてゐる。

エルミールロフ「チェーホフ研究」…読者の前には、生活を変え、ふるさとのすべてを花咲き馨る園に変えるための闘争の道を選んだ素晴らしいロシア娘（＝女性登場人物・アーニャ）「引用者註」の形象があることを理解する筈である。

井伏《桜の園》…読者の前には生活を変へるための闘争の道を選んだロシア娘の形象があることを読者は理解する筈である。

エルミールロフという人物は当初、評論家であつたが、一九三二年、「主観的観念論」を政権に批判され、文芸学者に転向している。文芸学者としての道も必ずしも平坦ではなかつた。そのような状況下において、『チェーホフ研究』や『チェーホフのドラマツウルギー』（一九五四年）は編まれた。それにも拘らず、ロシアにおける変革の歴史の変質についても、自身の思想の変遷についても、本人は明確

な言を残していない。したがって、エルミールフ説を引用するには本来、エルミールフのこの両著が、ソビエト・ロシアにおいて、〈文芸批評と芸術〉部門のスターリン賞を受賞したことに對し、複眼の如きものを以って向き合うことが不可欠である。《桜の園》が例え、牧原純翻訳の『チェーホフ研究』の「第三二節」の〈翻案〉であってもむろん不都合はない。しかし、《桜の園》記述中における、エルミールフ説の選択・依拠と、その写し取りとには、それを行なった根拠が本来必要だったはずなのである。

ロシアの数多くのチェーホフ論の間には、もとよりかなりの幅・隔たりが通時・共時的にある。『ロシア文学史』において、「チェーホフに對する手厳しい否定論」を展開したことで「知られる」ドミートリイ・ミールスキイを敢えて挙げるまでもなからう。ましてや、グリゴロヴィチ、コロレンコ、ガルシンにおいては言うまでもない。

8 コメディーとしての《桜の園》

8・1 《桜の園》の冒頭および末尾部分

エルミールフ説を祖述した井伏《桜の園》本文中の中間段落部分には、先述のように、その前後に二つの段落が付加されている。ここでは、中間の段落にもまして、それら部分に着目したいのである。《桜の園》本来の趣旨とは、冒頭、末尾の二つの部分、そしてそれらと中間部分との関わり合いのなかで、読者への伝達が目論まれているのではないのか。

8・2 《桜の園》冒頭部分の解析

明治三十七年、ロシア本国の芸術座で「桜の園」の幕が明け

た年、日本とロシアは旅順で戦争してゐた（中略）旅順港でも「桜の園」を上演し、司令官夫人がラネーフスカヤ夫人になり、若い中尉が老人フィルスに扮してゐたといふ。（中略）ちやうど旅順港に弾丸が落下したとき、ロシア兵たちは戦争が始まつたと錯覚した。「桜の園」の第四幕が始まるころであつた。（井伏《桜の園》）

右の事柄が事実かどうかの確認は今では困難である。確かなのは、旅順会戦が一九〇四年二月八日であり、「桜の園」の初演が同年一月一七日、モスクワ芸術座においてであつたこと、この二つである。初演から開戦まで僅かな日時しかない。初演の噂が喧伝され、遠く極東の旅順の地でそれが上演されたとするならば、ほとんど時を措かずに“ということになる。もともと当時、旅順のロシア軍人高官とその家族が演劇を好んだのは事実であつた。

スタルクは、麾下海軍将校を招き、陸上に於て大夜会を開き。スタルク夫人、海軍高等官夫人等を招き、併せて宴会を催したり。蓋し彼等は日本艦隊との戦闘を予期し、訣別の宴を張りしもの、主客俱に胸襟を披き、男女打混じて頗る打解けたり。又此日、恰も聖母マリアの命名日に際せしかば、艦隊及要塞の兵員は賜暇を得、劇場、珈琲店、酒舗、青楼其他興業場に沓至し、歓呼の声市中に満ちたり。斯の如くなれば露艦の将卒は、戦争の避く可らざるは予期し居たるも、さすがに今日なりとは思ひ設けざりし所なり。（『日露海戦記』 佐世保海軍勲功表彰会 一九〇六年七月）

二月八日は宛も露国太平洋艦隊指令長官スタルク夫人の誕辰に相当したりが此夜スタルク將軍は夫人の爲め祝賀の宴を陸上

に張り各艦の将校亦之に臨めり而して深更宴終る（『日露戦史大
全』（上巻） 宮部力次 一九〇六年四月）^(註33)

当時の日本人の間に膾炙された噂話であった。むろん、反論もある。

ロシア旅順艦隊がこのような不覚を取った（演劇の上演）

説は、酒好きのロシア人にはいかにもありそうな話で、当時はもちろん現在も根強く伝えられている。（しかし、）乗組みの一仕官は後日、このような中傷的な話を、今もなお耳にするが、そのような事実は断じてなかった（アプーシキン『一九〇四—一九〇五年の露日戦争』一九一〇年）、と強く否定している。

〔『日露旅順海戦史』 真鍋重忠 八五年二月）^(註34)

旅順戦勃発時の「桜の園」の上演、というのは井伏のことさらの脚色ではないのか。しかし当時の旅順において、仮に、皇帝・ニコライ二世の軍隊の軍人とその家族が「桜の園」を上演したとするならば、それはどのようなことを意味するであろうか。二〇世紀初頭、社会・歴史的役割を終え、時代の表舞台から退場していくこの戯曲の幾人かの登場人物さながらの役回りを、そのことに無自覚なまま、皇帝の股肱は演じたということになる。

しかし、ロシア皇帝麾下の軍人が、戯曲の内容への理解を怠ったまま、それを演じた、ということだけがファルスの事態なのではない。彼等の振る舞いを、滑稽とばかり笑ってはおられない。コメディイが意図された戯曲を、単なる（悲劇）と解釈して疑わなかった点では、チェーホフを受容した日本のインテレクチャルも、ロシアの軍人とさしたる違いはなかったのである。この事態も、言うならばファルスと呼び得よう。またそのように受け取られた戯曲その

ものも、ファルスの運命を負わされたのだと言えよう。つまり、井伏の《桜の園》は、このような位相の異なるさまざまなファルスの重層的な積み重なりによって成り立った文章なのである。《桜の園》自体が、コメディイということになる。（戦闘下の旅順における帝国軍人達の劇上演）というファルスの逸話を、井伏は好んだようである。同じ逸話を井伏は、小説「十二本の山毛櫨」^(註35)にも用いている。虚構性の強いこの逸話を作製するための「虎の巻」を、井伏は何に求めたであろうか。井伏がチェーホフ・クニツペル書簡を学生時代に読んでいたことは既述した。クニツペル宛チェーホフ書簡に、次のような一節がある。

このヤルタで、通りすがりのくずどもが『桜の園』を上演している。（一九〇四年四月一〇日）^(註36)

この土地の劇場で『桜の園』が上演された、ダリヤ・ロワ（女優ダリヤールの偽者）を座長とするなんともさもしい役者たちだ。（一九〇四年四月一五日）^(註37)

一九〇四年四月には、早くも、ロシア中央の有名女優の名前を振った地方廻りの女座長が、「桜の園」の「似て非なるもの」を上演して廻っていたのである。書簡中、チェーホフは加えて、自分の戯曲が正しく理解されないこと、自分の思惑通り演出・上演されないことに腹を立てている。

右のような過去に実際に起った、まるでファルスそのものの出来事に触発され、作家の意図がまるつきり無視された旅順での上演という新たなファルスを井伏が作り出したことが推定される。チェーホフ「桜の園」が、本来コメディイであることを今一度説明・確認させるために、井伏は新たなコメディイを仕立て上げたので

はないのか。

8・3 《桜の園》 末尾部分の解析

《桜の園》 末尾部分でも、右冒頭部分におけるそれと同じく、既存の「桜の園」解釈を相対化するための仕掛けが施されている。

その日、旅順港の少尉・中尉たちが（中略）「桜の園」を上演してゐた。当日、戦闘は開始されて砲艦二隻はすでに船を傾けてゐたが、沈没してゐるのではなかった。ロシアの兵隊たちは静かにして息を呑んだ。すでに戦闘は勝つてゐた。日本軍は（中略）為すところが無くなつた。すでに戦力はお仕舞ひになつてゐた。ロシア軍は「ウラー」の喚声をあげた。《桜の園》

これらは、現代人の「歴史常識」とは悉く異なつた虚構にみえる。しかし、《桜の園》中の右言は、過去の歴史の実質に今一度思い致すならば、必ずしも誤りとは言えなくなろう。出来事を、ただ現象面から見るのではなく、その歴史の意味に重きをおいて見るならば、右言にも充分、蓋然性が生じてくるのである。日露戦争の勝者は、日本ではない。天皇も、当時の閣僚もそのことを知悉していた。

（一九〇五年四月）二十一日 内閣総理大臣伯爵桂太郎、外務大臣男爵小村寿太郎と俱に天皇に御座所に謁し、日露講和条件に関する元老会議及び閣議の結果を奏す、日露開戦以来我が軍毎戦捷を報ぜりと雖も、時を閲すること一歳余、外に堅忍持久を称するも、内には兵力乏しく、財政亦窮し、朝野和平を思ふの情漸く切なるものあり（『明治天皇紀』第十一 宮内庁編）

日露戦争を表層的に解釈するならば、旅順は陥落し、帝政ロシアの没落は決定的になつた。しかしその一方で、この敗北はロシアに

おいては、一九〇五年および一九一七年の二度に互る大きな社会的変動を引き出す土壤を用意した。ロシア社会では、「桜の園」に宣言されるように、「さようなら、古い生活！」という言葉がまさに告げられんとしており、又、エルミローフの言うように、「今日は、新しい生活！」（『チェーホフ研究』）という挨拶を交わし得るような時代状況が着々と現実のものになりつつあつた。

9 変革の世紀に向けられた井伏の視線

井伏の《桜の園》は、その冒頭部分と末尾部分において、「桜の園」がコメディであることを銘記させ、そのコメディの質が、当時のロシアの状況に対する社会的批評精神を内包することを強調する。この銘記・強調は、チェーホフ文学に範を取りつつも、新たに井伏流のファルスを提示することによって行なわれている。《桜の園》における、本文中の、中間部分を除くその前後の部分の言説は、敢えてファルスを造出し得たという点で、その先駆性は明らかである。チェーホフ以後のロシア史を見通し、「桜の園」の作品としての歴史的意義を再把握・規定した点で、日本におけるチェーホフ受容の抜きん出た一つの典型にまで高まつている。

しかし、社会批評性という認識の特質とは、認識者に、その認識に伴われてしかるべき実践を要請する所にこそある。認識者がその認識を礎に、社会と相互して如何に生きるかという課題を背負うのである。そこが、一般的な「見識」と大きく異なる点である。チェーホフも、自身の社会批評性を巡って、「厭世主義者」と見なされた時代もあつたのである。このラディカルな事柄について、結論するならば、井伏の批評性の認識は文学の域に留まるものだったと言えよ

う。井伏の《桜の園》は、ラディカルな井伏の二〇世紀史観が遠く窺われるものになってはいるが、それは、必ずしもアンガージュに直接に結びつかぬものである。むしろ、この「遠く窺われる」という所にこそ、井伏とその文学の本質があるのだ。井伏は一九二八年、雑誌「新文化」において、ソヴィエト・ロシアの教育ポスターを翻訳した経験があった。^(註39)しかしそれ以降、社会的活動への参画に関しては、陸軍報道班々員としてのものを除いて特筆すべきものはない。

「プロレタリア文学は盛んになるでせうか？」との御質問に対しては、これまた折角ながら愚問として黙殺申上ぐべく、若しこの方に転換の希望あらば、「お止しなさい」と注意までに申すなり。^(註40)（随筆七月一日拝見）

井伏の資質は、次の言に極まると言えよう。

私は左傾しなかつたのは主として気無精によるものである。

私は非常に怠けものであつた。^(註41)（震災後の三年間）

私は左傾することなしに作家としての道をつけたいと思つてゐた。^(註42)（「ナツバ服流行時代」）

反駁を許さぬ大義、それは勤皇の志であれ、変革運動への挺身であれ同じことであるが、そのような大義が先取られた上に、それは実践の場においてこそ試されるという強制を他者から繰り返し押し付けられるならば、それにどのようにしてでも応えられない者にとつては、「気無精」という感情の言葉でしか自己を説明し得ないであろう。しかし、物事を論理的に説明しようとするのであれば、「気無精」なる言葉を用いた説明ほど、その方法として本来馴染まぬものはあるまい。

井伏のチェーホフへの関心は、七十余年の長きに及んだ。その

チェーホフとは、変革の時代の前後、文学をもって近未来を予見した人間であり、そのような人間・文学への井伏の関心は、時代変革の思想、そして、自身は終生そこに加わることのなかつた社会実践とそれに身を投ずる者達への井伏の関心・興味と重なりあうものであつた。関わり合いを自己規制するにせよ、心から離れることがなかつた変革という課題への継続的思惟・思索は、チェーホフ文学を媒介にすることによって存続したのだと言つてもよからう。

チェーホフの暗さは、チェーホフの時代に於ても民衆には同じく暗すぎたのに違ひない。現代人にとつてだけ暗いといふことはないのである。いづれであつたにしても、その時代に正しく生きようと努力する人には、必ず絶望が訪れるであらう。

アントン・チェーホフの物悲しさと人生への努力とは、正しく生きようとするとする人の作品には必ずにじみ出るものである。^(註43)（井伏「物悲しさと人生への努力」）

右にいう「民衆」の語は、ナロードの概念を想起させよう。「暗さ」、「物悲しさ」の言表はこれもまた、日本のこれまでのチェーホフ受容の情調を大きく外れるものではない。しかし、井伏の言う「正しく」とは、「変革」の一事を隠顕させはしまいか。すなわち、《桜の園》は、帝制の時代から変革の世紀への過渡期にロシアの地に現れた「社会を批評する文学の使徒」チェーホフへの、終生変わらぬ井伏の関心を示すものである。《桜の園》はさらには、長年に互つてそれについて考え続け、しかもそれを考え始めれば謂わば「気無精」になるような歴史の変革という事柄への井伏の執着、つまりは、「正しく生きようとするとする努力」への絶えざる眼差しによって生まれた文章であつた。

【註】

- (1) 「概観―日本におけるロシア文学」新谷敬三郎『欧米作家と日本近代文学』第三卷(ロシア・北欧・南欧篇) 福田光治他編 教育出版センター 一九七六年一月 三九、四一〜四二頁
- (2) 「日本文学とロシア文学」昇曙夢『比較文学』矢島書房 一九五三年一〇月
- (3) 「チェーホフ没後五十年に際して」神西清『東京新聞』一九五四年七月二二〜二四日 『神西清全集』第五卷 文治堂書店 一九七四年九月
- (4) 「チェーホフ―明治・大正の紹介・翻訳を中心に―」柳富子『欧米作家と日本近代文学』第三卷(ロシア・北欧・南欧篇) 教育出版センター 一九七六年一月
- (5) 「チェーホフ芸術の世界」佐藤清郎 筑摩書房 一九八〇年九月
- (6) 「ロシア・ソビエトにおけるチェーホフ評価」原卓也『チェーホフ研究』原卓也編 中央公論社 一九六〇年一〇月 五〇四頁
- (7) 「チェホフと日本文学」大谷深『國文學』一九六一年二月 學燈社
- (8) 「学校へ行く」『早稲田文学』一九三六年六月
以下、井伏言説からの引用は全て、筑摩書房版『井伏鱒二全集』(一九六六年一月〜二〇〇〇年三月)に拠る。
- (9) 「困難なこと」『近代生活』一九三一年五月
- (10) 「早稲田生活」『早稲田文学』一九三六年八月 『鶏肋集』竹村書房 一九三六年十一月
- (11) 「オロシヤ船」〔後記〕金星堂 一九三九年一〇月
- (12) 「チェーホフ」〔「チェーホフ全集」推薦文〕中央公論社版『チェーホフ全集』内容見本 一九五九年一二月
- (13) 「チェーホフの「熊」について」『文学界』一九五四年一〇月
- (14) 「井伏鱒二「鯉」の成立と背景」和田利夫『日本文学』一九七五年一月に次のようにある。
- 「早大在学中『にいはり』という回覧雑誌をやっていて、それにはたしか井伏鱒二の「山椒魚の嘆き」というのがあった。」(青木南八の友人・最上孝敬(経済史家・民俗学者)からの聞き書き)
- (15) 「私の文学的生活」『新潮』一九三五年二月
- (16) 「山椒魚」について『現代作家自作朗読集』朝日ソノラマ 一九六六年一月
- (17) 「作家に聴く」井伏鱒二『文学』一九五二年九月
- (18) 「井伏さんから聞いたこと」(その二)伴俊彦『井伏鱒二全集』第九巻『月報』3 筑摩書房 一九六四年一月
- (19) 「半生記―私の履歴書―」『早稲田の森』新潮社 一九七一年九月
- (20) 「ヴォードヴィル」鈴木康司『世界文学大事典』5 集英社 一九九七年一〇月 一〇二〜一〇三頁
- (21) 「喜劇」喜志哲雄『世界文学大事典』5 集英社 一九九七年一〇月 一九三頁
- (22) 「現代日本文学の問題」片上伸『新潮』一九三二年一月『現代日本文学全集』第二八篇 改造社 一九三〇年二月 四四八頁
- (23) 「笑劇」大場建治『世界文学大事典』5 集英社 一九九七年一〇月 三八四頁
- (24) 「虚無よりの創造」(チェホフ論) シェストフ 河上徹太郎訳『チェーホフ研究』原卓也編 中央公論社 一九六〇年一〇月 九頁
- (25) Тев Ильцов, 'Впечатление из Москвы, 1908
- (26) 「欧米諸国におけるチェーホフ」篠田一士『チェーホフ研究』原卓也編 中央公論社 一九六〇年一〇月 五一四頁
- (27) 「チェーホフ没後五十年に際して」『東京新聞』一九五四年七月二二〜二四日 『神西清全集』第五巻 文治堂書店 一九七四年九月 五七五〜五七六頁
- (28) 「チェーホフとの最後の出会い」ウラジミール・レオナルドヴィチ・クニツベル(一八七六〜一九四二年)『文学遺産―ロシア文学とロシア社会思想の歴史から 一八六〇―一八八〇年代』第八七巻 モスクワ

「ナウカ」出版所

引用は、以下の書に拠った。『チェーホフのなかの日本』 中本信幸 大和書房 一九八一年五月 一六〇頁

(28) 「専制とプロレタリアート」「フベリョード」第一号 一九〇五年一月四日

『ウリヤノフ』全集』第八巻 大月書店 一九五五年一月 八〇九頁
この件については、以下のものの披見が必要である。

「旅順の陥落」(「フベリョード」第二号 一九〇五年一月一四日)

「壊滅」(「プロレタリアー」第三号 一九〇五年六月九日)

(29) 「チェーホフ研究」エルミローフ 牧原純・久保田淳訳 未来社 一九五三年七月 三三六頁

Владимир Владимирович Ермилов (1904. 10. 16-1965. 11. 19), A. П. Чехов, 1949

(30) 「チェーホフと批評家たち」川端香男里 『薔薇と十字架—ロシア文学の世界—』 青土社 一九八二年二月 三〇七頁

(31) ロシア・ソヴェエトの評論家。一八九〇—一九三九年。一九三〇年代に肅清された。主著『ロシア文学史』(一九二七年)。

(32) 『日露海戦記』第一編 戦勢決定時代(第一期)『第四章 旅順口初度の攻撃』(第一節 駆逐隊の襲撃) 佐世保海軍勲功表彰会 佐世保海軍勲功表彰会 発行 一九〇六年七月 三六—三七頁

(33) 『日露戦史大全』(上) 『海戦』《駆逐隊の夜襲》 宮部力次 一九〇六年四月 一一五頁

(34) 『日露旅順海戦史』「三 日本駆逐隊のロシア旅順艦隊夜襲」 真鍋重忠 一九八五年二月 二二—二三頁

(35) 「十二本の山毛櫨」『別冊文芸春秋』一九五七年六月—六〇年三月

(36) 『チェーホフ クニツベル往復書簡』(3) 牧原純 編訳 麦秋社 一九八七年二月 二四六頁

(37) 『チェーホフ クニツベル往復書簡』(3) 牧原純 編訳 麦秋社 一九

八七年二月 二五四頁

(38) 『明治天皇紀』第十一 宮内庁編 吉川弘文館 一九七五年三月 一二八—一二九頁

(39) 井伏『オロシア船』「後記」(金星堂 一九三九年一〇月)に次のようにある。

「私は昔からロシアの南下政策に大いに関心を持つてゐた。」

(40) 「井伏鱒二の知られざる一面」西田勝 『文学的立場』第三巻 一九七〇年二月

(41) 「隨筆七月一日拝見」(七月一日拝見) 『文芸都市』一九二八年八月

(42) 「震災後の三年間」『早稲田文学』一九三六年九月 『鶏肋集』竹村書房 一九三六年十一月

(43) 「ナツパ服流行時代」『早稲田文学』一九三六年一〇月 『鶏肋集』竹村書房 一九三六年十一月

(44) 「物悲しさと人生への努力」『春陽堂月報』第三五号 一九三〇年四月 『明治大正文学全集』第九巻(広津柳浪・広津和郎篇) 『付録』

The reception of Anton Chekhov's literature in Japan

— understanding of “Vishnyovyi sad” by IBUSE Masuji —

KONO, Motoki

近代日本のアントン・チェーホフ受容は、レフ・シェストフ『虚無よりの創造』の影響下に長く留まっていた。井伏鱒二は、この“情意”的なチェーホフ解釈の傾向に対して、チェーホフ文学の“社会批評”性に着目し、その相対化を計る。井伏の随筆「桜の園」は、ウラジーミル・エルミーロフ説を祖述しつつ、チェーホフ戯曲『桜の園』を思索的なコメディ、ファルス、ヴォードヴィルと理解し、歴史時代に相互するその社会批評性の質の再規定を行なっている。